

# OKoTaC 通信

## オコタック

2016年2月29日発行

# NO.27



### P 2 NPO活動報告(1)

外国にルーツをもつ子どもの教育支援学習会

『日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ

～多様な子どもたちの日本語指導を考える～』

### P 3 NPO活動報告(2)

『府立高校生による地下鉄通訳ボランティア 続報』

### P 4 特別寄稿(1)

『ピアにほんごの歩み』②

### P 5 Air Mail メキシコ便り⑤

『グアダラハラ、テキーラ(後篇)』

### P 6 みんなの日本語、みんなで NIHONGO! ⑦

『2 + 3 = 5』

### P 7 特別寄稿(2)

『「定住外国人子ども奨学金」(兵庫)の活動紹介』③

### P 8 NPO活動報告(3)

オコタック会員交流セミナー『サタディクラス 10年の歩み』

イベント情報





## おおさかこども多文化センター 活動報告(1)

外国にルーツをもつ子どもの教育支援学習会

### 『日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ

### ～多様な子どもたちの日本語指導を考える～』

1月31日(日)大阪市立阿倍野市民学習センターにおいて、広島で25年間、日本語指導で活躍されている二口とみゑさん(一般社団法人HOPEプロジェクト代表)にお越しいただき、上記学習会を36名の参加で実施しました。今回は事務局の報告に加え、参加者の澤田さんからの感想もお伝えします。

.....

学習会の前半は、日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況や、子どもの日本語教育の変遷について解説されました。そして多岐にわたる活動のなかで出会った子どもたちのことや、在留資格など法的支援をする際の心得についてなど、日本語指導の支援者が必ず出合うであろう、さまざまな問題への対処法など、ご自身の経験を交えながら話されました。参加者にとっては、どのお話もこれからの活動にとっても参考になるものでした。後半は参加者との質疑応答でしたが、いろいろな方面からの質問に的確にお答えいただきました。



二口さんのお話の中では「寄り添う」という言葉がキーワードとしてしばしば出てきました。子どもに「寄り添う」ためには、子どもの日本語力はもちろん、生い立ちや現在の家庭環境を知ることは、その子にあった指導をする上で必要なことです。例えば医者が治療の最初に問診するように、子どもにじっくり話を聴くことが重要なことなのです。そして次に日本語指導をする際に気をつけることは、学習者の対面に座るのではなく、横に座るなどの工夫をすることで、威圧感をやわらげ、マラソンでいえば伴走型の支援となるのです。

また、次のようなエピソードも紹介されました。ある日、被支援者を伴って入国管理局に出向いた時のことです。厳しそうな係官に二口さんが一言「入管も大変ですね」と。この言葉でその場は係官と打ち解けた雰囲気になったとのことでした。つまり二口さんが言われる「寄り添う」とは、相手の立場を思いやり、今、相手は何を必要としているのかを視野に入れ活動するということではないでしょうか。

もう一つ、この学習会で心強く思ったことがありました。それは参加者の中にたくさん若者たちがいたことです。彼、彼女たちはボランティアで子どもたちに日本語指導などを行っている大学生・院生たちで、熱心に質問するなど、この学習会に積極的に参加してくれていました。(Y.H)

#### 「学習会」に参加して――

(子どもにほんご教室カリヨン(堺) 澤田節子)

穏やかで心地よく聞こえてくる「慈母観音の声(二口さんの知り合い曰く)」には似つかわしくない「口にギブス、顎はワイヤで矯正…」で始まった二口さんのお話は、事故の負傷で「言葉を発することができず、コミュニケーションが難しい状況を経験したことがある、というご自身の体験談からだった。

二口さんは常に「今、何がしたい？」と寄り添いながら、子どもたちの中に入っておられる。そして、子どもたちが幸せに生きることができるために、不安の解消や、子どもたちの母文化の理解、情報の多言語化を図ること、さらに、こうした相談支援活動などの貴重な経験を通しての想いを、熱く語って下さった。二口さんが外国語を学ぶ難しさを痛感されたという、ドイツ語で歌う「第九、alle Menschen ♪」のお話を聞くと、私自身、ドイツ留学当初が切なく蘇った。大学・銀行の手続きから部屋探しまで、一人おろおろと駆け回り、「通じない」もどかしさ・情けなさを、いろいろと世話をしてくれたチューターにぼやいた際、紹介されたのがコーラス部だったのだ。現在ベルリンに暮らす彼女の長男の小学校では、体育館が難民で溢れ、子どもたちのための「Willkommensklasse(歓迎クラス)」が設置されるとのこと。増々困難極まるEU情勢の中での、呼称の温かさが嬉しい。

さて、日本でも外国人による家事代行サービスの受け入れが、いよいよ本格始動だ。中国帰国集住地域と称された泉北ニュータウンも、今や中東ヨルダン出身の住民までが暮らすシルクロード状況となっている。多様性を楽しみつつクリエイティブ&ポジティブに、共に時代を生きていきたいと思う。





## おおさかこども多文化センター 活動報告(2)

### 府立高校生による地下鉄通訳ボランティア 続報

『OKoTaC 通信』24号で報告したように「府立高校生による地下鉄通訳ボランティア」は夏休みに加え、冬休み、さらに2月の春節の時期にも活動しました。

今回はこの活動を通じて生まれた成果について報告します。

#### 活動の目的は達成できたか？

この活動の目的は計画段階では次の3項目でした。

- ① 渡日生徒への社会的認知を広げる。
- ② 社会参画経験の機会を設ける。
- ③ 自尊感情を高める。

①は新聞・テレビなどのメディアで紹介され、渡日生の存在を一般の人々に知ってもらう上で大きな成果があったと思います。毎日放送、関西テレビとも放送された日が夏休みだったので、多くの学校関係の方から視聴したとの連絡を受けました。ただし、一過性のものなので十分とはいえません。もっと継続的に渡日生の存在を可視化させることができないかと考えています。

②は日頃、日本社会と関わりを持つ機会が少ない渡日生にはいい経験になったと思います。

③は以下に示すように、当初の期待以上の成果があったと考えています。

#### 活動中こんなエピソードがありました！

本来の活動場所である券売機前で案内していると突然、駅長室にすぐ出向くように要請がありました。行ってみると、中国からの観光客が待っています。どうも、周遊チケットの購入でトラブルがあったようで、

駅員さんの簡単な中国語では対応できず、高校生ボランティアに通訳を依頼したのです。もちろん高校生の通訳で問題は解決しました。このとき、高校生ボランティアが駅員さんからも観光客からも笑顔で感謝されていた場面が印象に残っています。実はこのように高校生の通訳により問題を解決した事象は、参加したほとんどの生徒が経験しています。まさにこの場面で生徒は社会で自分が必要とされていることを実感でき、自尊感情を高める上で最も適した経験をしているのではないのでしょうか。

多くの渡日生は将来も日本に定住することを希望しています。日本社会が受け入れてくれるか、居場所があるか、就労できるか等、多くの不安を持ちつつ生きています。そんな状況の中で、このような経験を持てたことは多少なりとも心の支えになったのではないかと考えています。春休みも実施予定です。駅で活動を見られたら、一度高校生の活躍ぶりをじっくりご覧ください。

ボランティアに参加した生徒が感想を寄せているので、その一部を紹介します。

……自分も他人のために役に立ち、困っている人を助けられると知り、とても自信になりました。……

今回のボランティア活動は、私にとってとても貴重な経験となり、自信にもつながりました。内向的な私が人と話すことに、とても勇気を持てるようになりました。…… (八尾北高校PTA新聞 2015年12月24日号より) (Y.H)



大阪府交通局から感謝状を受け取って喜ぶ高校生たち。府庁で

ボランティアで通訳高校生41人に感謝状  
大阪府交通局

大阪府交通局は市営地下鉄の主要駅で外国人観光客向けのボランティア通訳を買って出ている高校生41人に感謝状を贈った。

41人は八尾北、門真なみや、福井、桃谷の府立4校に通う生徒で、中国やフィリピンなど外国にルーツを持つ。今年度の夏休みや冬休みを中

心に、市営地下鉄の梅田駅などで駅員が外国人観光客を案内する際、母語を生かしてボランティアで通訳を務めた。

府庁であった授与式には、各校を代表して生徒4人が出席。中国出身で八尾北高2年の付超さん(19)は「外国から訪れた人の不安を解消できたすればうれしい。人に伝える力が身につき、自分にとってもいい経験になった」と話した。

【大久保昂】

大阪府交通局から感謝状をいただきました

(毎日新聞 2016年1月18日朝刊)

村上 自子 (ピアにほんご コーディネーター、おおさかこども多文化センター 理事長)



編集部より

前号では「大阪府日本語教育支援センター(ピアにほんご)」事業を立ち上げるに至った想いを、大阪府教育センターの小川さんに書いていただきました。今回は、それでは実際にどのように「ピアにほんご」が開設されたのかを、この事業のコーディネーターである村上から紹介します。

★ ★ ★

中国残留孤児の日本帰国に伴って来日した子どもや、1990年の入管法の変更により、南米から就労のために来日した日系人に呼び寄せられた子どもなど、日本語指導の必要な帰国・渡日の子どもたちが、やがて高校に入学する年齢になってきました。そんな中、すでにおこなわれていた入学試験時の特別配慮に加え、2001年からは大阪府立高校に「中国帰国生徒及び外国人生徒入学選抜」の特別枠校が設置され、日本語が十分でない生徒も高校に入学しやすくなりました。そこで入学後、学校生活を支援し、それぞれの希望する進路を保障するため、生徒の母語ができる「教育サポーター」を学校外部から派遣する事業が、2005年9月に始まりました。当初は、大阪府教育委員会市町村教育室 児童生徒支援課から(特)関西国際交流団体協議会に委託する形でした。

リソースセンターとしての機能をもつ支援拠点の設置については、府教委の担当者を含め、大学研究者、日本語教師、教育サポーター、高校教員、地域の国際交流協会職員など、様々な立場のメンバーが会合を重ね、下記のような設立趣意書が作成されました。それをもとに「ピアにほんご」が、2007年1月18日に開設されました。



日本語指導や母語による学習支援を必要とする帰国・渡日などの子どもたちが増加し、教育行政や地域のNPOなどにおいてさまざまな支援が行われるようになった。しかし、その支援状況や支援に必要な多言語の教育資料、日本語教材、人材などは地域や学校で個別に蓄積されており、全体としての共有化が十分ではない。支援を必要とする子どもたちは今後も増加傾向にあり、情報の一元化と適切な提供、支援体制の充実が求められている。

このような状況から、通訳や翻訳などの支援を行う人材や日本語教育の教材、教育方法等についての情報を集約し、帰国・渡日の子どもの教育に携わる教育関係者、日本語や学習の支援をするボランティアやNPOスタッフに、支援に必要な適切な情報・資料を提供し、相談に対応する。そして、サポーターの派遣や教員・スタッフの研修を行うことにより、教育活動を支援し、帰国・渡日の子どものサポートの拠点とする。(趣意書抜粋版より)

ピアにほんご事業の具体的な展開としては、三つあります。まずひとつ目は、府立高校の教員及び各校に派遣している教育サポーターを対象に、支援方法・教材等の情報提供や専門機関とのコーディネート。二つ目は、当面は日本語での対応だが、段階的に多言語でサービスを提供していくことを検討。そして三つ目は帰国・渡日児童生徒支援に関わる小・中学校の教員・支援者・ボランティア、並びに日本語が不自由で、かつ日本の教育について十分な情報を持たない子どもと保護者をも対象とするなど、将来的には拡充が必要であるとし、外国につながる子どもたちに関わる広範囲な支援を視野に入れていました。そして、学習支援、情報提供、相談業務、ネットワーク拡充、調査・研究・研修など各機能をあわせ持つ、「外国にルーツを持つ子どもの教育支援センター」を目指す、としています。



.....

以上のような構想で始まった「ピアにほんご」は、開設して今年でちょうど10年目を迎えました。次号では、コーディネーターとしてこの間を振り返りながら、帰国・渡日生徒の状況の変化と「ピアにほんご」の変遷について、書いてみたいと思います。





海外からのたよりをお届けします～

## メキシコ便り⑤ 「グアタラハラ、テキーラ(後篇)」

(おおさかこども多文化センター会員・金野広美)

イダルゴ神父に合掌した次の日の朝、バスで北西に約 50 キロ、その名もテキーラ村にあるテキーラ生産工場のホセ・クエルボ(スペイン語でカラスの意味)社に向かいました。途中は行けども行けどもア



ガベ(竜舌蘭、テキーラの原料=写真左)の畑。アガベは植えられてから、だいたい6年から8年で収穫され、葉と根を特別の鎌で切り取り、茎を大きなボールのようにします。この大きなボールがテキーラの原材料になるのです。

私もアガベ畑で切り取りを体験させてもらいました。本当によく切れる鎌で、ちょうどホタテ貝の貝殻のような形なのですが、たいした力をいれなくてもスパスパと切れてしまい、5人のツアー客だけで不十分ではありますが、ひとつのボールができました。そしてこのボールを工場に運び込みます。

畑から工場に着くと玄関には5、6メートルはあるかと思われる、大きな恐竜のようなカラスの彫刻があり、そのそばには本物のカラスが2羽、鳥かごに入って迎えてくれました。この会社の創業者がホセ・クエルボさんなのですが、よほどカラスを愛していたのでしょね、その真っ黒い彫刻の巨大さにはちょっとびっくりしてしまいました。

この工場は 1795 年に創業した、世界でも売り上げナンバーワンの会社なのですが、その長い 200 年

あまりに及ぶ歴史のビデオを見せてもらったあと、さっそく工場内を見学させてもらいました。一歩中に入ると大きなボールになったアガベがたくさんころがっています。このボールはパイナップルによく似ているのでピーニャ(スペイン語でパイナップルの意味=写真右)と呼ばれます。これをいくつか区切られた小部屋のようなところで蒸すと、とても甘いにおいがしてきます。この段階で絞って飲むとアガベジュースが楽しめるのです。そして、ピーニャを1週間ほど戸外に置いたのち絞り、この絞り汁を発酵させて蒸留したらテキーラの出来上がりです。工場では蒸しあげられたピーニャがコーヒー色をして次から次へと、小さな出口からごろんごろんと出てきます。周囲には甘いにおいが充満しています。



できたてのテキーラが試飲できるというので、もちろん飲んでみましたが、塩もリモン(スダチのような形をしたレモン)もない中でキュッといくと、さすがにちょっと強すぎてくらっときてしまいました。それでも同じツアーで一緒になったマリアはテキーラが大好きだそうで、何度も試飲して、お昼を食べに入ったレストランでも、また何杯もマルガリータを頼み、私にも勧めてくれます。

マルガリータはホワイトキュラソー(オレンジ風味のリキュール)や、レモン、ライムジュースとテキーラを混ぜたものですが、その名前のかわいらしさとあいまって人気のあるカクテルで、とってもおいしいので



す。マリアはとにかくよく飲み、よく食べ、よくしゃべり、その勢いで、私の分のお勘定も全部払ってくれました。ラッキー、ラッキー、テッキーラ、自分も相手もみーんな幸せにしてしまうテキーラだーい好きです。



## みんなの日本語、みんなで NIHONGO ! ⑦

「 $2+3=5$ 」

井上 泰雄(Minami こども教室 コーディネーター、おおさかこども多文化センター会員、  
元大阪市立市岡中学校 帰国した子どものセンター校 日本語・適応指導教室担当)

日本語のコーナーに、数字の表題ですみません。

さて、「 $2+3=5$ 」、このたし算を日本語で読むとどうなりますか。「2と 3を あわせると、5に なります」「2に 3を たすと、5に なります」「2より 3 おおきい かずは 5です」…どれでしょうか？ 私の場合はこの中には無く、「2 たす 3 は 5」です。これが一般的だと思いますが、先の3つの表現は、小学校1年算数の教科書の中での表現です。では、なぜこんな言い方をするのでしょうか。



それは小学校1年の教科書では、生活の中の事例から、数のたし算を教えるからです。登場するのは、こども、ひよこ、いぬ、きりん、りんご、えんぴつ、ばす、いすなどです。これを数えると、ひとり、いちわ、いっぴき、いっとう、いっこ、いっぼん、いちだい、いっきやくとなり、すべて1を表します。

問題文になると、どうでしょうか。「あかい つみきが 2こ、あおい つみきが 3こ あります。つみきは ぜんぶで なんこ ありますか」「どんぐりを あいさんは 2こ、みきさんは 3こ ひろいました。ぜんぶで どんぐりは なんこですか」「きよしさんは 2ばんめに ならんでいます。きよしさんの うしろに 3にん います。みんなで なんにん いますか」。



つい最近、このような小学校1年算数の教科書を見ました。そしてその時、私はショックを受けたのです。渡日の子どもたちにとって、これはあまりにむずかしいと感じるのは私だけではないと思います。学校教育のスタートラインから、これほどむずかしい「日本語の壁」があるとは私は今まで思ってもいなかったのです。

しかし、少し視点を変えると、渡日の子どもたちにとって、むずかしい算数の教科書は、日本語の教科書にもなるのです。というのは、算数の教科内容は、教科書に使われているブロックで、

たし算、ひき算の計算のし方を教えます。ブロックは、十の位の意味を教えるのにも便利です。そしてブロックの説明の表記は、「 $2+3=5$ 」、使う日本語は、「に たす さん は ご」です。そして、教科内容が理解できた後に、生活の事例を入れていきます。例えば、「あわせていくつ」「ふえるといくつ」「のこりはいくつ」「10 よりおおきいかず」というように。

渡日の子どもたちにとって、算数の勉強も段階を踏んでいくと、「日本語の壁」から「日本語の勉強」に変わっていくのですね。







## 特別寄稿（２）「定住外国人子ども奨学金」（兵庫）の活動紹介③

山本晃輔（大阪大学特任助教、おおさかこども多文化センター会員）

定住外国人子ども奨学金（以下、奨学金）の活動の柱は「奨学金の給付」である。給付のためには運営費がなければ活動が立ち行かない。具体的には、3 学年 9 人の奨学生を受け入れると年間 162 万円が必要となる。さらに事務局の運営も考えなければならない。しかし、本奨学金には原資となる基金や強力なスポンサーが存在しているわけではない。運営費を確保するためには、返済型の奨学金にすることも解決策になるが、本奨学金は給付型の奨学金を目標としてきた。したがって、本奨学金の最大の課題は「安定的に収入を確保すること」である。

運営費を得る活動として「個人・団体からの寄付金の受け入れ」「募金箱の設置」がある。募金箱は兵庫県の公共施設や NPO、エスニックレストランに設置している。しかし、運営を賄えるほどの寄付金を集めることができていない現状にある。そこで、多くの収益化しにくい教育事業と同じく、運営費を様々な助成金によって補おうとしている。ところが、受諾した助成金の多くは「活動」への助成であり、助成金を「奨学金」として給付することは「譲渡」になるため、助成金を獲得してなんらかの事業を行い、奨学金の運営費を獲得することが必要となる（表参考）。

これらの事業活動は、実行委員と事務局、そして大学生・大学院生を中心としたボランティアによって運営されている。もちろん、こうした事業も「収益性」を追い求めるだけでなく「外国にルーツを持つ子どもたちの状況」を啓発できるような内容を目指している。例えば、ボランティアとして活躍する大学生や大学院生は、奨学生にとっては年代の近いモデルであり、イベントなどを通じて相互に交流する機会になるよう工夫している。最も大きなイベント

募金箱の設置活動
ドネーション（寄付）パーティー
各種イベントでの出店
各種助成金を活用した事業活動
チャリティーコンサート

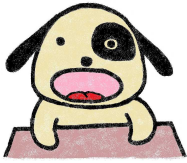
は年に一回のチャリティーコンサートである。チケットを販売するだけでなく、広告収入や協賛・支援団体を募る。直接的な寄付よりもコンサートチケットを購入するほうが、寄付活動に参加しやすいという狙いもある。これらの事業活動に年数回、奨学生もボランティア活動をする。ただし、こうした事業活動に奨学生を「巻き込み過ぎない」ようにも配慮している。奨学生にとっては学校生活が主役で、本奨学金におけるボランティア活動はあくま

でも裏方であるからだ。ある報道関係者からは「広く浄財を集め受け取る以上、当事者である奨学生が表立ってインタビューを受ける責任がある」といった趣旨の取材依頼があった。この種の「お金を受け取るのだから、当事者が表に出なければならない」という議論は少なくない。しかし、こうした議論には、「経済的な格差や不平等を是正する責任の所在を当事者に置く」という点にそもそもの課題がある。言うまでもなく、経済的な格差や不平等の是正の責任は、当事者ではなく日本社会にある。したがって、本奨学金では事業活動を通じて幅広く日本社会から活動を支えていただくのである。



本奨学金は 9 期目の奨学生を迎える準備をしている。一度受け入れた奨学生を、期間中に放り出す訳にはいかないという重い責任がある以上、本来は任意団体が行うような事業ではないが、現在のところ奨学金の受給希望者の数は減少していない。本奨学金の挑戦が継続できたのは、奨学生の将来に期待を寄せる支援者に支えられてきたからであり、なにより「奨学金があったから」という奨学生の声に後押しされてきたからである。こうしたポジティブな側面を振り返りつつも、今後の展望を考えたとき、草の根的な活動が全国的に広まるだけでなく、行政を巻き込んだ公的な社会制度が望まれるのではないだろうか。

定住外国人子ども奨学金 (<http://www.social-b.net/kfc/scholarship/>)



## おおさか子ども多文化センター 活動報告(3)

### オコタック会員交流セミナー『サタディクラス 10年の歩み』

昨年12月26日(土)、オコタックの会員交流を兼ねたセミナー「サタディクラス 10年の歩み」がヒューライツ大阪セミナー室で参加12名を集めて行われた。当日の講師はサタディクラスの代表・坪内好子さん。まずサタディクラスの歴史から話し始められ、写真や文部科学省の資料をもとに、増える外国ルーツの子どもに対する支援の重要性について熱く語られた。

サタディクラスは2003年、高校に進学した子どもが教科書の日本語がわからないため、もっと勉強したいという坪内さんへの訴えから始まった。当初は阿倍野中学の一室を間借りしていたが、その後、多文化共生センターなどとの協力のもと、現在十三と中崎町で運営されている。特に十三では2013年からたぶんか進学塾も開講され、サタディクラスで学んだ子どもが塾の先生として活躍をしている。

また10月17日には10周年を祝うパーティを催し、そのパネルディスカッションの中で子どもが語った「ずっと思い続けていたら必ずできる」という言葉に坪内さんは感動、この気持ちを自分の後輩たちに伝えていって欲しいと言われる。そして、新しい10年の始まりとして今後は、支援の行き届いていない西淀川地区に新たな教室を作るべく、準備を進められているようだ。これらのお話をうけ、その後の交流会では子どもたちへのサポートについて参加者の間で大いに語り合われた。

(H. K)



## イベント情報

### 「高校生活オリエンテーション」(大阪府教育委員会主催)

日時: 2016年3月26日(土) 13:00~16:00

場所: 大阪府立今宮工科高等学校

対象者: 28年度大阪府立高校に入学する帰国・渡日生徒および保護者

内容: 「学校のルール」「卒業後の進路」「学費」など、日本の高校生活で大切なこととお話します。

卒業生の体験談も聞くことができます。保護者の方と一緒に参加してください。(通訳あり)

※入学する高校の先生を通じて申し込んでください。

問合せ先: 大阪府日本語教育支援センター(ピアにほんご) Tel 050-3513-1497

大阪府教育委員会高校課 Tel 06-6491-0351



NPO 法人 おおさか子ども多文化センター 代表 村上 自子

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8階

Tel/Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com

URL http://okotac.org

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ぜいけいけい))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824)

口座名義『NPO法人 おおさか子ども多文化センター』

〇カナ: トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター)

